

AMCoR

Asahikawa Medical University Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

皮膚科の臨床 (1992.08) 34巻8号:1156～1157.

銀留置針による局所性銀皮症

橋本喜夫、飯塚 一、松本光博、水元俊裕

Mini Report

銀留置針による局所性銀皮症

橋本喜夫* 飯塚 一*
松本光博** 水元俊裕**

症 例：59歳，男
初 診：1987年10月13日
主 訴：左肩から左上背部にかけての皮疹
現 病 歴：約30年前に肩こりのため左上背部から左肩にかけて約30本の銀針を留置したという。その数年後から同部位に色素沈着が出現し徐々に拡大してきたため旭川厚生病院皮膚科を受診した。
現 症：後頸部および左中背部の2カ所に母指頭大までの青色から黒青色の馬蹄形をした色素斑を認める(第1図)。また左肩から後頸部にかけては帯状の青灰色の色素斑も認められた、中背部の色素斑を生検した。

病理組織学的所見：HE染色では表皮は基底層の hypermelanosis を認める以外に著変なく、真皮では上層から下層にかけて暗褐色から黒褐色の顆粒が散在性に認められた。これらの顆粒は真皮乳頭層においては表皮と垂直方向に樹枝状に分布し、真皮網状層では表皮とほぼ平行に膠原線維間に認められた(第2図)。また脂腺および汗腺などの皮膚付属器周囲、血管周囲に同様の顆粒が密集して認められた(第3図)。Fontana-Masson, ペルリン青染色ではこれらの顆粒は陰性であった。

なお、生検時に長さ約0.5cmの埋没針が1本摘出された。

電顕所見：血管周囲および内皮細胞内に100~400nmの類円形または不整形の電子密度の高い顆粒が散在性に認められた(第4図)。また血管周囲の fibroblast 内にも顆粒が認められた。弾力線維と顆粒との関連は自験例でははっきりせず、汗腺基底膜部の観察は行いえなかった。

X線微小分析電顕：組織内顆粒状物質に一致してAgおよびSのピークを認めた(第5図)。以上の所見から局所性銀皮症と診断した。

治療および経過：一部を切除した以外は、患者の希望により積極的に治療を行わなかった。まもなく患者が来院しなくなったため、その後の経過は不明である。

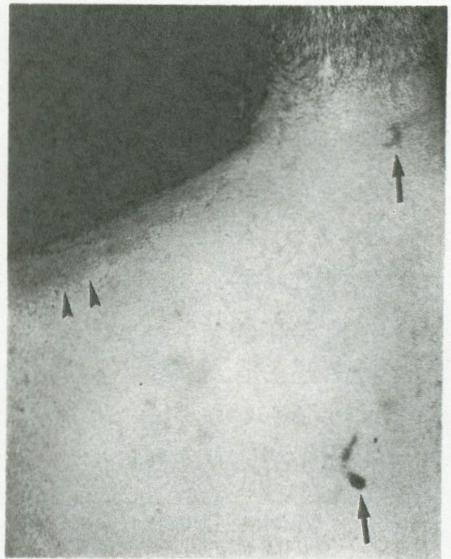
考 按

局所性銀皮症は、銀化合物の経皮吸収または人為的

* Yoshio HASHIMOTO & Hajime IIZUKA, 旭川医科大学, 皮膚科学教室(主任: 飯塚 一教授)

** Mitsuhiro MATSUMOTO & Toshihiro MI-ZUMOTO, 旭川厚生病院, 皮膚科(主任: 水元俊裕部長)

[別刷請求先] 橋本喜夫: 旭川医科大学皮膚科(〒078-11 旭川市西神楽4線5号)



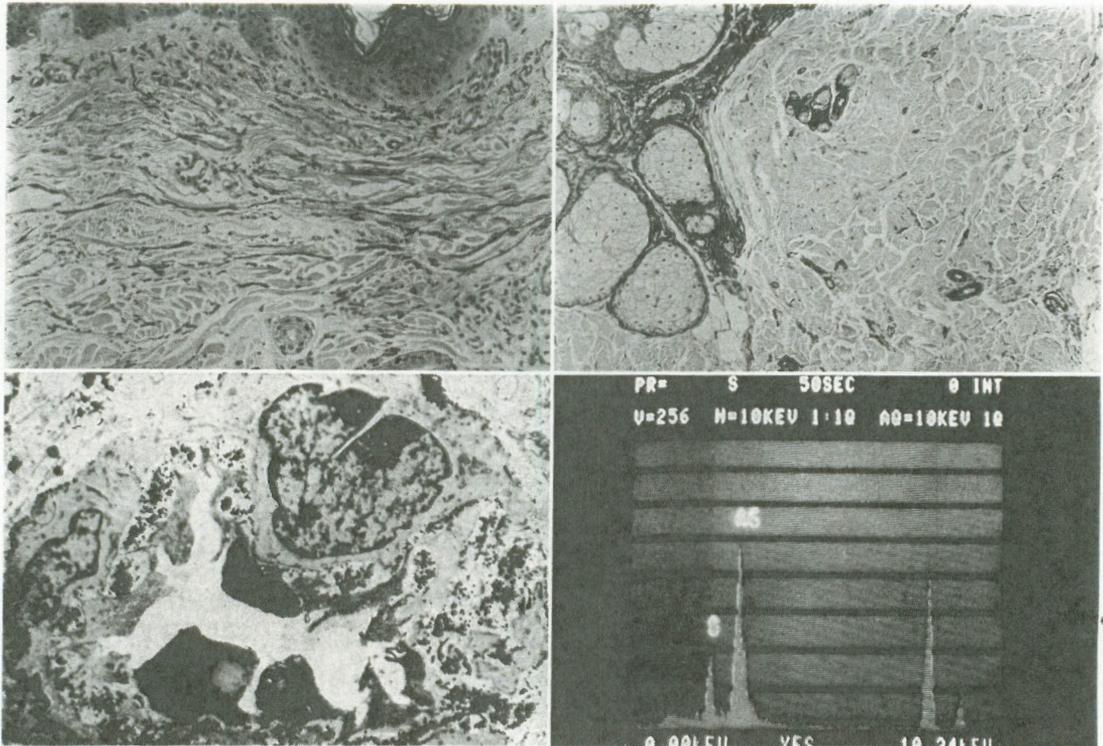
第1図 臨床所見：後頸部，および左中背部に黒青色の色素斑(矢印)を認める。左肩には帯状の色素斑(矢尻)も認める。

埋没により皮膚に銀が沈着する疾患であるが、戦後の本邦報告例はかなり少なく、比較的まれなものと思われる。われわれが調べたかぎりでは第1表のように戦後自験例を含め17例が報告され、そのうち13例が銀製の留置針によるものであった。その他銀製縫合糸によるもの¹⁾、外傷によるもの²⁾なども報告されている。

Buckley ら³⁾は局所性銀皮症において銀は硫化銀の形で存在することを電顕的に証明したが、自験例でもX線微小分析電顕で顆粒状物質から銀および硫黄が検出され、硫化銀の形で存在している可能性が示唆された。また自験例では光顕レベルで、汗腺や脂腺周囲に密な顆粒の沈着を認めたが、電顕では残念ながら観察しえなかった。

徳橋ら⁴⁾は汗腺基底膜の basal lamina 内ではなく、その真皮側に沈着を認め、basal lamina に近接するほど微細粒子になる所見を報告している。このことから、チャージバリアとして働く陰性荷電をもったアニオンサイト⁴⁾に一致して銀粒子が沈着している可能性も考えられた。

(1991年10月18日受理)



2 | 3 第2図 組織所見 (HE 染色)：黒褐色の顆粒が、真皮乳頭層では垂直方向に、真皮網状層では膠原線維間に認められる。
 4 | 5 第3図 組織所見 (HE 染色)：脂腺，汗腺，血管周囲に黒褐色の顆粒が密に集簇して認められる。
 第4図 電顕所見：血管周囲，内皮細胞内に 100~400 nm の電子密度の高い顆粒が認められる。
 第5図 X線微小分析電顕：組織内顆粒状物質に一致して Ag および S のピークを認める。右は Cu-Grid のピーク。

第1表 報告例のまとめ

症例	報告者	年齢(歳)・性	原因	部位	発症までの期間
1	皆見	52 男	銀含有消毒液	外陰，会陰部	不明
2	松本ら	64 男	銀含有縫合糸	左鎖骨部	29年
3	比江嶋ら	47 女	銀含有針	鼻	2年
4	比江嶋ら	20 女	銀含有針	鼻	2年
5	山口ら	73 女	銀メッキ針	四肢	38年
6	岡ら ²⁾	56 男	外傷	指背	まもなく
7	徳橋ら ¹⁾	78 男	銀含有縫合糸	下顎	18年
8	加藤ら	63 女	銀含有針	四肢	13年
9	山崎ら	54 女	銀含有針	全身処々	6ヵ月
10	前田ら	47 女	金メッキ銀針	眉間	2年
11	矢田ら	69 女	銀含有針	左上腕，左肩	10年
12	吉田ら	84 男	銀含有針	左鎖骨部	10数年
13	小川ら	61 女	金針?	両手背	不明
14	新村ら	22 男	銀含有針	耳前部，鼻背部	4年
15	鵜殿ら	57 男	銀含有針	肩	13年
16	鵜殿ら	72 男	銀含有針	両下腿	13年
17	自験例	59 男	銀含有針	左肩，左上背部	数年

文献

1) 徳橋 至ほか：臨皮，39：429-434，1985
 2) 岡 大介ほか：臨皮，38：612-613，1984

3) Buckley WR et al：Arch Dermatol，92：697-705，1965
 4) 熊切正信：現代皮膚科学体系，年刊版 '88-A，山村雄一ほか編，中山書店，1988，19-24頁